

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

海域世界の地域研究が目指す新たな地平線〈基幹研究：海域アジア・オセアニア研究〉

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2023-04-03 キーワード: 作成者: 小野, 林太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00010014

海域世界の地域研究が目指す新たな地平線

小野 林太郎

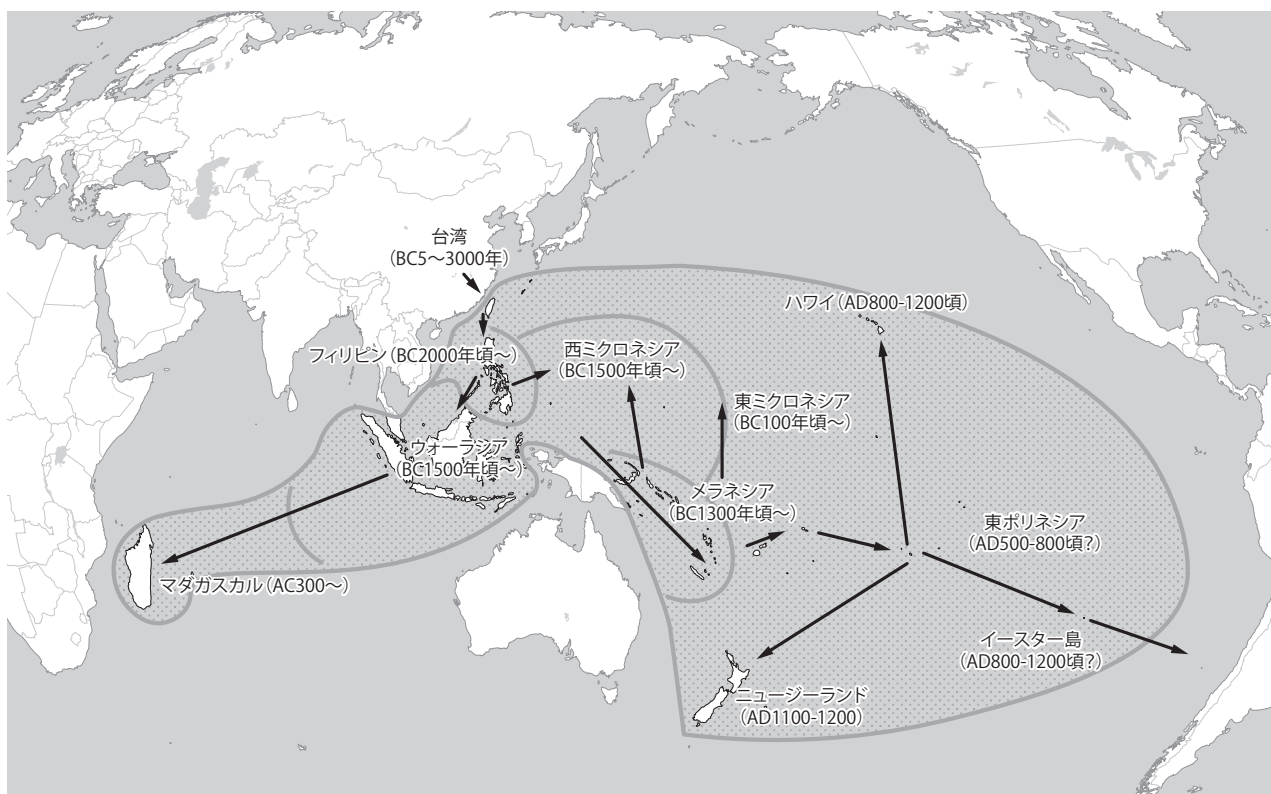
本研究の対象地域と特色

本研究プロジェクトの広義の対象地域は、海域アジアとオセアニアである。両地域をつなぐ共通項は「海域世界」であり、本研究はこの「海域世界」を軸に陸域よりも海の視点に比重を置く地域研究を試みる点に大きな特徴がある。このように、陸域に基づく国家や東アジアや東南アジア、オセアニアといった従来の地域概念によって分断されがちな地域研究ではなく、海域という視点を強調することで、東アジアや東南アジア、さらにはオセアニアといった複数の地域を同時に対象とできるような新たな地域研究の実践を目指している。

このうち海域アジアとして想定されるのは、日本・琉球列島や台湾、東南アジア島嶼域といった海と島からなる海域世界のほか、アジア大陸部の沿岸域も含まれる。アジアでは広く西アジア、南アジア、東南アジア、東アジア、北東アジアが沿岸域を持つが、本研究ではとくに東アジアから東南アジアにおける島嶼域とそれらに隣接する沿岸域（中国・韓国・東南アジア大陸部）を狭義の対象とする。

実際、古来よりこの東アジアや東南アジアの大陸部沿岸域から島嶼域にかけて人類の移住やモノ、宗教、文化の移動が繰り返されてきた。とくに西のインド文明圏と東の中国文明圏の中間に位置する東南アジア圏は、2000年前頃の金属器時代以降、海上交易によるネットワーク網が発達し、東西両方面から宗教や食・物質文化に至るさまざまな影響を受けてきた地域でもある。また人類史的にみれば、東南アジアの海域世界における人類の移住や多様な文化的要素の動きは、新石器時代期までさかのぼり、オーストロネシア語族の拡散に代表されるようにオセアニアの海域世界へも波及し、両地域は言語・歴史的に連動しつつ現代へと至っている。

一方、オセアニアはミクロネシア・メラネシア・ポリネシアといった南太平洋に浮かぶ島嶼群、およびオーストラリア大陸とニューギニア島からなり、1つの大きな海域世界として捉えることが可能である。とくにオーストラリアやニューギニア島を除く南太平洋圏の島々は、言語学的にオーストロネシア語圏として共通し、新石器時代にさかのぼる人類移動によって、言語や文化、さらには遺伝的にも台湾の先住民（原



海域アジア・オセアニアとオーストロネシア語族の主な移住ルート・移住年代（筆者作成）



第1回 MAPS (海域アジア・オセアニア研究) 全体研究会の様子 (2022年11月13日、国立民族学博物館、門馬一平撮影)

住民族) や東南アジア島嶼の人びととの共通性が高い。

さらに現代においてオセアニアや海域アジア圏は、「太平洋の世紀」とも言われるように、地政学的にきわめて重要な位置をしめつつある。とくに中国の台頭による南シナ海や南太平洋圏への多様な分野(経済・開発援助・文化協力、軍事・防衛)での進出と、アメリカを中心としてこの海域圏に強く関係してきた国々との軋轢や摩擦は年々激しさを増している。一方で、オセアニアにおける島嶼国家の多くは、経済のみならず、歴史文化的にも中国や日本など東アジアとの強い関係性を保ちつつ、現代社会を構成してきた経緯がある。

本研究の目的とその独創性

このような理解に基づき、本研究は海域世界における環境変化と人類文化の動態的研究という共通テーマの下、(1) 対象地域を「オーストロネシア」語族圏としての基層文化的な共通性が根底にあることを認識しつつ、これらの島嶼域における人類の移住や定住化、言語の多様化、あるいは資源利用やそのほか食・物質文化、宗教といった諸要素をめぐる基層文化的理解を目指す。またこれらの研究によって得られた新たな地域概念の提唱を進めつつ、本研究では同時に(2) 現代における海域アジアからオセアニアにおけるヒトやモノ、情報をめぐる越境的な動き・ネットワークに関して、総合的に把握することをもう1つの目的として掲げる。

これらの目的をさらに追究する個別の研究テーマとして、①開発と生業・文化遺産、②災害・移動・フロンティア性、③食のグローバル化・健康・気候変動、④移民・先住民間の経済・宗教・物質間関係からなる4つのテーマを軸に、海域世界という地域的枠組みから多角的なアプローチを試みる。

本プロジェクトでは、これらのテーマに関わる研究成果を総合し、従来の国家や地政学的な地域概念ではなく、海域アジア・オセアニアの両地域を「海域世界」という視点から再認識することで、各地域における開発や生業、食生活、災害といった人びとと環境の相互の関係性、あるいは人びとの移動に伴う越境や環流の動態について再検討を試みる。とくに国民国家や日本のアカデミズムが偏向してきたような地域的枠組みに縛られた研究としてではなく、本プロジェクトのメンバーがそうした地域・専門的な枠組みを超えて共同することで、「海域世界」としての文化・社会的共通性やその固有性を明らかにしつつ、対象とするテーマにおける各地の課題群

小野 林太郎 (おの りんたろう)

国立民族学博物館学術資源開発センター准教授。専門は海洋考古学、東南アジア・オセアニア研究。主な著書に『海域世界の地域研究—海民と漁撈の民族考古学』(京都大学学術出版会 2011年)、『海の人類史—東南アジア・オセアニア海域の考古学』(雄山閣 2017年)、共編著書に『図説 世界の水中遺跡—水底に眠る時の証人を求めて』(グラフィック社 2022年)など。

に取り組む方向性は、本研究プロジェクトの持つ大きな特徴として強調できよう。

本プロジェクトの構成とネットワーク

人間文化研究機構の第4期ネットワーク型基幹研究プロジェクトである「グローバル地域研究推進事業」の下に計画された本プロジェクトでは、ほかの地域研究プロジェクトと同様に4つの拠点で構成されたネットワーク型の地域研究を試みる。民博拠点はその中心拠点となり、そのほかの3つの拠点は東洋大学アジア文化研究所(以下、東洋大拠点)、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(以下、京大拠点)、東京都立大学人文社会学部(以下、都立大拠点)が担う。各拠点の構成は、10名前後のコアメンバーと複数の研究協力者からなり、プロジェクト全体では100名に近い研究者たちが関わる。また各拠点はそれぞれのテーマを掲げつつ、お互いに連動しながら研究を進められる体制作りにも励んできた(その試みは現在も進行形である)。

先に示したテーマとの関係では、民博拠点が①の開発・生業・文化遺産、東洋大拠点が②の災害・移動・フロンティア性、京大拠点が③の食のグローバル化・健康・気候変動、都立大拠点が④の移民・先住民間の経済・宗教・物質間関係をキーワードに、海域アジアからオセアニアの各地域でのフィールドに基づく研究を進める。このうち民博拠点がとくに注目するのは、島嶼世界で進むインフラ開発や資源開発に対し、その影響を直に受ける(1) 農業や漁業といった生業活動の変化やその動態、(2) 開発による影響を直接的に受ける遺跡や文化遺産の保護や観光資源化の問題、(3) グローバル化や開発への抵抗としても活発化する文化復興やアイデンティティの再認識化であり、その歴史的動態と現状を明らかにしていくのが目的である。

またワークショップや共同研究会などの積極的な実施により、各拠点を越えたメンバー間での共同や対話を行う計画もある。今年度においては2022年11月に民博を会場として、全4拠点のメンバーが集う最初の全体研究会を開催し、積極的な意見交換を行うことができた。これらの試みやお互いによる切磋琢磨のプロセスを通して、従来の地域概念や地域別に蝸壺化しつつある地域研究の枠組みを超えた、新たな学際的かつ地域横断的な地域研究のあり方とその方法を模索していきたい。